

現代文問題集第七冊

言葉の働きと文章の仕組みを読む

標準／発展 論証・物語・会話・詩

和会塾

この冊子の使い方

この冊子では、言葉が何を述べているかとともに、どのように述べられているかを読みま
す。定義や数値を具体例と照合し、物語の時間、会話の応答、詩の行の切れ目にも目を向け
ます。

まず本文や資料を読み、設問が何について説明を求めているかを確認しましょう。記述問
題には、答えを書く欄とメモ欄があります。メモは必要なときに使えます。ノートに組み
んでも構いません。

各章は、本文・設問・解答欄、解答・解説の順に並んでいます。記述問題には模範解答と
二つの別解例があります。言葉が同じだけでなく、問いに答えているか、本文の根拠と説
明がつながっているかを比べてください。表現の働きを問う問題では、異なる根拠の組合せ
で十分な答えになる場合もあります。

一章ずつ取り組んでも、関心のある章から読んでも構いません。本文や批評への賛同、自
分の経験の開示を求める本ではありません。前の冊子をすべて終えていることも条件にはし
ていません。

句読点や括弧などの記号も一字と数えます。段落番号は本文へ戻る目印です。物語では引用された言葉や場面を、
戯曲では台詞とト書きを手掛かりに確かめてください。

目次

第一章	定義の縁	4頁	／	解答・解説	9頁
第二章	数字の顔	12頁	／	解答・解説	17頁
第三章	三分間の出来事	22頁	／	解答・解説	29頁
第四章	反論はどこに届くか	33頁	／	解答・解説	39頁
第五章	規則と裁量	42頁	／	解答・解説	50頁
第六章	どうぞのあとで	55頁	／	解答・解説	62頁
第七章	条件のかたち	66頁	／	解答・解説	72頁
第八章	行の切れ目で	76頁	／	解答・解説	84頁
あとがき・奥付		90頁			

各章は、本文・設問・解答欄、解答・解説の順に進みます。

第一章 定義の縁

この章で身につける力 定義と具体例を照合し、分類の基準と目的との関係を読みます。

① 小さな演奏会を開く人たちが、倉庫で「楽器一覧」を作っている。机には笛と太鼓、その隣には、もともと菓子が入っていた金属の空き缶がある。今回は笛を吹き、空き缶をたたいて音を重ねる。太鼓は使わず、倉庫に残す予定だ。ところが、一覧に空き缶を書き込んだところで、一人が手を止めた。「これは楽器に入れるの？」

② この場では、楽器という言葉に二通りの定義を与えられる。定義甲は「音楽を演奏するために作られた物」、定義乙は「今回の演奏で音を出すために使う物」とする。ここで定めるのは、それぞれの一覧でこの言葉をどう使うかである。世の中のあらゆる楽器に通用する説明を、今ここで決着させようとしているのではない。

③ 定義甲を使えば、笛と太鼓は一覧に入り、菓子を入れるために作られた空き缶は入らない。太鼓を今回は使わないという事情は、この分類を変えない。製作されたときの用途に沿って、倉庫にある物を整理したいなら、この定義が役に立つ。目の前で音が鳴るかどうかを、そのつど試す必要もない。

④ 定義乙では、笛と空き缶が入り、今回は使わない太鼓が外れる。この一覧なら、演奏で音を出す物を会場へそろえるときに使える。名前だけを見て太鼓を積み込むことも、空き缶を置いていくことも避けやすい。ただし、音を出さない譜面台などは含まれないので、これだけで演奏会の持ち物すべてを確かめられるわけではない。

⑤ 二つの一覧の違いは、空き缶の材質が変わったためでも、太鼓が壊れたためでもない。何に着目するかが変わったのである。同じ「楽器」という名を使っているとしても、一方は作られた目的、もう一方は今回の使い方に線を引き根拠を置く。定義が分かれば、一覧に載っている物をただ覚えるだけでなく、別の物を加えるときにも、何を確かめればよいかが分かる。

⑥ もっとも、定義は、物についてのあらゆる問いに答えるものではない。定義甲から空き缶が外れても、よい音が出ないと判断されたわけではない。定義乙から太鼓が外れても、

次の演奏会で使う価値まで否定されたわけではない。ある一覧に載るかどうかと、物の価値をどう評価するかとは、別の判断である。分類の結果をそのまま価値の順位に置き換えると、定義が答えていないことまで答えたように見えてしまう。

⑦ では、空き缶も入る定義乙のほうが、定義甲より範囲が広く、優れているのだろうか。

⑧ そうともいえない。乙は甲に入らなかった物を含む一方で、甲に入っていた太鼓を含まない。物を一つ加えたからといって、もとの一覧を丸ごと包み込んだことにはならない。ここで変わったのは、線の位置だけでなく、線を引く根拠である。

⑨ 倉庫の整理を続ける人と、会場へ運ぶ物を確認する人が、一枚の一覧を使うこともあるだろう。そのとき、「楽器は全部書いた」という言葉だけでは、何を確かめ終えたのか分からない。表題の下に使った定義を添えれば、読み手はその一覧で確かめられることと、別に確かめる必要のあることを見分けられる。机の上では、笛も太鼓も空き缶も、さっきと同じ場所にある。

本文・設問の事例は本教材のための創作です。

設問

問一

第五段落の「線を引く」とは、この文章ではどのようなことですか。最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 演奏の準備を早く終えるために、倉庫と会場で物を置く場所を決めること。

イ 物を取り違えずに運ぶために、一覧にある名前を一つずつ消していくこと。

ウ 同じ音を出せる物をまとめるために、鳴った音の高さや強さを比べること。

エ 着目する事柄を決めて、楽器という名で扱う物と扱わない物を区別すること。

解答

「 」

問二

太鼓と空き缶の扱いが変わる例から、この文章に即していえることを一つ選びなさい。

ア 分類する基準を変えると、物が同じでも、一覧に含まれる物の組合せは変わり得る。

イ 分類に新しい物を含めると、それまで含まれていた物もすべて引き継がれる。

ウ 物を分類する目的が変わると、それに応じて、物が作られたときの用途も変わる。

エ 演奏に使う物を一覧にまとめると、演奏会へ運ぶ持ち物はすべて確かめられる。

解答

「 」

問三

定義甲では、太鼓と空き缶をどのように区別でき、それはどのような整理に役立ちますか。五

解答欄
五〇～七〇字

[illegible]メ
モ

必要に応じて、根拠となる箇所や答案の順序を書き留めましょう。

解答・解説

本文の道筋 ①～④で、同じ物を二つの定義に当てはめます。⑤～⑧では、分類の基準、価値判断との違い、範囲の変化を検討し、⑨で一覧を使う場面へ戻ります。

問一

正答 エ

根拠と判断 第五段落では、作られた目的と今回の使い方という二つの着目点を比べています。それぞれを基準に「楽器」に入る物と入らない物を区別する、というエの意味です。物理的な線を床や紙に描く話ではありません。

他の選択肢 アは物の置き場所を決める作業、イは運ぶ物を確認する作業です。どちらも、言葉に含める物の範囲を決めることとは違います。ウの音の高さや強さは、甲・乙いずれの定義の基準にもなっていません。

問二

正答 ア

根拠と判断 第三・第四段落で、太鼓と空き缶の扱いが逆になることを確かめます。第五段落の「何に着目するかが変わった」という説明に合うアが適切です。この例が示すのは、物を変えなくても分類は変わり得るということです。

他の選択肢 イでは甲の太鼓が乙から外れる点を落としています。ウは現在の分類目的と過去の製作用途を混同しています。エは、第四段落で除かれている譜面台なども一覧から確かめられると広がっています。

問三

設問の条件 定義甲による太鼓と空き缶の区別を示し、その区別がどのような整理に使えるかを説明します。

根拠から答案へ 第二・第三段落では、甲の基準を「音楽を演奏するために作られた物」としています。太鼓は含まれ、菓子容器として作られた空き缶は除かれます。今回使うかどうかは左右されず、製作時の用途を確かめて整理できる点を結びます。

模範解答〔六九字〕 演奏のために作られた太鼓を楽器に含め、菓子を入れるために作られた空き缶を除くことで、今回の使用予定によらず、製作時の用途で物を整理できる。

別解例①〔六七字〕 太鼓は演奏用に作られたので含め、空き缶は菓子の容器なので含めない。この区別は、今使うかどうかではなく、作られた目的による整理に役立つ。

別解例②〔六九字〕 今回は使わない太鼓も演奏用に作られた物として含め、今回たたく空き缶も菓子の容器として除く。現在の使い方によらず、製作時の用途で整理できる。

答案で注意したい点 「太鼓はよい音が出るから」「空き缶は演奏に向かないから」という説明は、甲の定義にありません。「太鼓だけを残す」と書くと、笛まで外れたように読めます。二つの物についての区別だと分かるようにします。

☆**自己採点の観点** 太鼓を含め、空き缶を含めない理由が、作られた目的に結びついていますか。その基準がどのような整理に役立つかを示していますか。

問四

設問の条件 同じ二つの物について甲と乙の分類結果を比べ、乙の分類目的と、単なる範囲の拡大とはいえない理由を結びます。

根拠から答案へ 甲にない空き缶は乙に入り、甲にある太鼓は乙から外れます。入る物が増える方向だけの変化ではありません。今回音を出す物をそろえるという目的に合わせて、製作用途から今回の使用へ基準を変えたとまとめます。

模範解答 (九五字)

甲にない空き缶が、今回音を出す物として乙に入り、甲の太鼓は今回は使わないので外れる。会場で音を出す物をそろえるのに役立つが、甲の物をすべて残して加えたわけではなく、単なる範囲の拡大ではない。

別解例① (九四字)

乙では今回たたく空き缶を加え、使わない太鼓を外すので、甲の物を丸ごと含むわけではない。製作時の用途から今回の使用へ基準を変えた分類であり、会場で音を出すために必要な物をそろえる際に役立つ。

別解例② (九六字)

太鼓は甲では含まれるが乙では外れ、空き缶は甲では外れるが乙では含まれる。今回音を出すために使う物を集める目的に合う一方、甲にあった物の一部を除いてもいるので、甲の範囲を広げただけとはいえない。

答案で注意したい点

「乙は何でも楽器と認める」「乙のほうが優れている」とは書けません。また、この一覧だけでは譜面台などを確認できないので、「演奏会に必要な物を全部そろえられる」と広げないようにします。譜面台の例を必ず答案に加える必要はありません。

☆**自己採点の観点** 空き缶が入る変化と太鼓が外れる変化の両方を示していますか。今回音を出す物をそろえる目的に結び、甲全体を包み込む拡大ではないと説明していますか。

第二章 数字の顔

この章で身につける力 数値から確かめられることと、原因についての説明を区別し、追加で調べる事柄を根拠とともに示します。

① 図書館の入口に、旅を題材にした本が並んでいる。遠い国の写真集の隣に、近所の道を歩いた記録が置かれ、普段は別の棚にある本が一緒に見渡せる。次の資料は、このような展示を始めた図書館を想定した記録である。展示のある週は、ない週より貸出冊数が多い。この数字を広報に載せるなら、「展示期間中に貸出が増えた」と書くか、「展示によって貸出が増えた」と書くか。わずかな言葉の違いだが、引き受ける説明は同じではない。

② まず、数えたものを確かめたい。資料の貸出冊数は図書館全体の合計で、展示した本だけの数ではない。来館者数も、本を借りた人だけを数えたものではない。展示を眺めて帰った人も、自習に来た人も含まれる。数字は対象を決めて数えた結果である。「何が増えたか」を読み違えると、その理由を考える前に、説明の出発点が変わってしまう。

③ 資料では、来館者数の多い週ほど貸出冊数も多い。こうした数値の間の関連を調べるとき、相関という考え方を用いる。ここで見えている関連は、一方が他方の原因だと決めなくても記述できる。ところが「展示によって」と書くと、展示が貸出を増やしたという因果の説明を加

えることになる。その説明を支えるには、展示以外の変化も調べる必要がある。

資料 ある図書館の四週間の記録

学習用の架空記録。連続する四週間を比較する。各週の開館日数は六日、開館時間は同じ。来館者は一日につき一人一回と数え、別の日の来館は重ねて数える。貸出は図書館全体の冊数である。

④ 例えば、図書館が学校の休みに合わせて展示を計画し、同じ休みのために来館や貸出が増えたのかもしれない。この場合、休みという別の条件が、展示の実施と貸出の両方

週	展示	延べ来館者 数人	貸出冊数 冊
第一週	なし	二〇〇	三〇〇
第二週	なし	二四〇	三六〇
第三週	あり	三〇〇	四五〇
第四週	あり	三二〇	四八〇

に関わる。ただし、資料には学校の休みの記録がない。ありそうな説明を思いつくことと、その説明を確かめることは別である。また、休みの影響があったとしても、展示の影響がなかったとは限らない。複数の事情が同じ結果に関わることもある。

⑤ 貸出冊数を来館者数で割り、来館一回当たりの冊数を比べる方法もある。どの週も同じ値なら、来館の規模に比べて貸出が多くなった、とは言えない。しかし、それだけで展示に効果がなかったとも言えない。展示の案内を見て来館した人がいたなら、展示が来館を通じて貸出に関わった可能性が残る。比べ方を変えると確かめられることも変わるが、一つの比率が原因の説明をすべて代わってくれるわけではない。

⑥ では、何を追加すればよいのだろう。休みが共通の条件だと考えるなら、まず学校の休みの時期と、展示日程を決めた経緯を確かめる。そのうえで、休みの条件が同じ期間に展示の有無で違いがあるかを比べれば、休みだけによる説明を検討しやすくなる。展示が来館のきっかけになったと考えるなら、来館の理由を尋ねる調査が手掛かりになる。ただし、答えた人の記憶や、回答しなかった人の存在にも注意が要る。

⑦ 調査を始める前に比較の仕方を決めることもできる。十分な数の期間を用意し、展示するかどうかをくじのような方法で決めれば、特定の季節に展示が偏ることを避けやすい。それでも偶然の偏りや、前の展示が後の期間へ及ぼす影響は点検する必要がある。統計を使った原因の検討には、このような調査の組み方や、何を同じ条件とみなせるかという根拠も関わっている。集計表だけを眺めているのではない。

⑧ 広報に戻ろう。貸出が増えたという記録は残せる。展示の成果として紹介したいなら、その先にある説明を支える調査が要る。確かめていない原因を言い切らないために、確かめられた増加まで消す必要はない。同じ数字でも、何を数え、何と比べ、どの言葉を添えるかで、読み手に差し出す内容は変わる。

設問

問一 資料の読み取り

資料から直接確かめられることとして、最も適切なものをア～エから一つ選びなさい。

ア 展示のある二週間では、展示した本の貸出が、ない二週間より二七〇冊多い。

イ 展示のある二週間では、同じ人が借りた冊数が、ない二週間より二七〇冊多い。

ウ 展示のある二週間では、全体の貸出冊数が、ない二週間より二七〇冊多い。

エ 展示のある二週間では、貸出を利用した人数が、ない二週間より一八〇人多い。

解答 〔 〕

問二 説明の飛躍

第四段落を踏まえた検討として、最も適切なものをア～エから一つ選びなさい。

ア 休みに合わせた展示計画かを調べ、確認できれば貸出増は休みの影響だったと判断する。

イ 休みが展示の実施と貸出に関わったかを調べ、関わりがあっても展示の影響は別に検討する。

ウ 展示の有無と貸出冊数の対応を調べ、その対応が続けば休みを共通の原因と判断する。

エ 休みと貸出増が重なったかを調べ、確認できれば休みに合わせて展示が計画されたと判断する。

解答 〔 〕

問三 本文と資料を結ぶ

資料の各週について、第五段落の方法で「来館一回当たりの貸出冊数」を求めた。この結果の説明として、本文に最も合うものをア～エから一つ選びなさい。

ア 展示のある週の値が大きいため、展示は来館者一人一人の借りる冊数を増やしたと考えられる。

イ どの週も値が等しいため、展示のある週に貸出総数が増えたという読み取りは修正される。

ウ どの週も値が等しいため、展示を続けても貸出総数は変わらないと予測する根拠になる。

エ どの週も値が等しいが、展示が来館を促したかは、この値だけでは決められない。

解答 〔 〕

解答・解説

本文の道筋 ①～③で数えた対象と説明の違いを確かめ、④～⑤で別の原因や比べ方を検討します。⑥～⑦は追加調査の方法、⑧は広報に書くことの整理です。

問一 資料の読み取り

正答 ウ

確かめる箇所 第二段落と資料の見出し・注記を照合します。展示なしの二週間は三〇〇冊と三六〇冊、展示ありの二週間は四五〇冊と四八〇冊です。合計はそれぞれ六六〇冊と九三〇冊なので、後者が二七〇冊多いと確定できます。

選択肢の違い アは図書館全体の冊数を「展示した本」の冊数に変えています。イの「同じ人」の貸出を追う個人別記録はありません。エは延べ来館者数の差を、貸出を利用した人数の差として扱っています。数値が合っていても、数えた対象が違えば同じ事実にはなりません。

☆自己採点の観点 □ 差の数値と、その数値が何を数えたものかを、両方確かめたか。

問二 説明の飛躍

正答 イ

確かめる箇所 第四段落には、休みが展示の実施と貸出の両方に関わる可能性と、それをまだ確認していないことが書かれています。イは両方への関わりを調べる必要を残し、休みの影響と展示の影響が併存する可能性も保っています。

選択肢の違い アは休みに合わせた計画だけで、貸出増への休みの影響まで確定しています。ウは展示と貸出の対応から、記録にない休みの影響を導いています。エは休みと貸出の時期が重なったことから、展示日程を決めた理由まで推測しています。いずれも、確認した関係とは別の関係を足した点が問題です。

☆自己採点の観点 □ 調べて分かった関係と、そこから付け加えた関係を区別できたか。

問三 本文と資料を結ぶ

正答 エ

確かめる箇所 各週の貸出冊数を来館者数で割ると、すべて一・五冊です。第五段落が指摘するように、この比率が同じでも、展示が来館を促したかどうかは未確定です。比率の確認と、来館が増えた理由の確認は別なので、エが合います。

選択肢の違い アは計算結果と合わず、一人一人の変化も資料からは分かりません。イは比率が等しいことを理由に、総数が増えた事実を取り消しています。ウは四週間の比率から、展示が続けた場合の総数まで予測しています。比率の等しさは、総数の等しさや将来の見通しを意味しません。

☆自己採点の観点 □ 比率が同じことと、貸出総数が同じことを混同しなかったか。

問四 原因と断定できない理由

問いを確かめる 説明するのは、人が数字を信じやすい一般的な理由ではなく、この資料から展示の効果を断定できない理由です。まず資料にある変化を示し、その変化に対して別の説明が残ることをつなぎます。

根拠と組み立て 第三段落では、数値の関連と原因の説明が区別されています。第四段落の休みの例を使うと、「展示のある週は貸出が多い。しかし、休みが展示の実施と貸出の双方に関わったかもしれない」とまとめられます。二七〇冊という差を使っても構いませんが、具体的な差の数字は必須ではありません。

模範解答 展示のある週はない週より貸出冊数が多いが、学校の休みなど別の条件が展示の実施と貸出の両方に関わった可能性を、この資料だけでは除けないから。

別解例① 展示のある週に貸出冊数が多いことは分かるが、学校の休みが展示の実施と貸出増の双方に関わった可能性もあり、原因を区別する情報がないから。

別解例② 展示のある週の貸出冊数が多いものの、学校の休みという別の事情が展示の実施にも貸出増にも関わりうるため、数値の対応では原因を決められないから。

答案で注意したい点 「休みが原因だから」と書くと、本文が可能性として述べたことを事実へ変えてしまいます。「相関は因果ではないから」だけでは、何が資料にあり、どの説明が未確認なのかが伝わりません。別の条件を挙げる場合も、展示の実施と貸出の両方にどう関わることが必要です。

☆自己採点の観点 □ 展示のある週の貸出が多いという事実を書いたか。

□ 別の条件が展示と貸出の両方に関わる可能性を、未確認のまま残せたか。

□ そのため展示の効果と断定できない、という関係を説明したか。

問五 追加調査を考える

問いを確かめる 第四段落の可能性を繰り返すのではなく、第六段落にある調査の順序を答えます。休みという説明をまず確かめ、その説明だけで足りるかを見るための比較を組み立てます。

根拠と組み立て 最初に調べるのは、休みの時期と展示日程の決定経緯です。次に、休みの条件が同じ期間で、展示のある場合とない場合の貸出を比べます。「何をそろえ、何を変えて比べるか」を具体化すると、休みだけで貸出増を説明できるかという目的につながります。

模範解答 学校の休みの時期と展示日程を決めた経緯を確かめ、休みの条件が同じ期間で展示の有無による貸出冊数の違いを比べる。休みだけで貸出増を説明できるかを検討し、展示の影響をさらに調べる手掛かりとする。

別解例① 休みの時期を調べ、展示がそれに合わせて計画されたかを確認する。そのうえで、休みの条件が同じ期間の貸出冊数を展示の有無で比べ、休みだけによる説明で足りるか、展示の影響も検討すべきかを確かめる。

別解例② 学校の休みと展示の実施が結びついていたか、休みの時期と日程決定の経緯から確認する。次に、休みの条件が同じ期間で展示の有無と貸出冊数を比べ、休みだけでは説明できない違いが残るかを検討する。

答案で注意したい点 「ほかの条件も調べる」だけでは、調査も比較も具体的になりません。また、休みの条件をそろえて差が残っても、それだけで展示の効果が証明されたとは言えません。来館者の違いなど、ほかの条件が残りうるからです。差がない場合も、展示の影響が一切ないと断定するのではなく、調べた範囲で説明を見直します。

部分答案から直す 「休みの時期と展示日程を調べる」と書いていれば、説明を事実にもとづいて第一段階は捉えています。そこへ、休みの条件をそろえた展示の有無の比較と、その比較の目的を補うと、問いの全体に答えられます。

☆自己採点の観点 □ 休みの時期と、展示日程を決めた経緯を確認対象にしたか。

□ 同じにする条件と、比較する展示の有無・貸出冊数を示したか。

□ 休みだけによる説明を検討する目的を書き、展示の効果の証明としなかったか。

第三章 三分間の出来事

この章で身につける力 出来事の順序と、場面の語られ方を確かめます。

三週間、航は夕食のあとに笛を吹いた。最初の週は同じところで止まり、次の週にはそこだけが早くなった。金曜日、最後まで通せたので、翌週の土曜の演奏会に出ると先生に連絡した。それからの一週間は、うまく吹けた日も、前よりつかえた日もあった。

会場は駅の裏の小さなホールだった。航の出番は二時二十分で、客席の入口には手書きのプログラムが貼ってあった。自分の名前の「航」の右側だけが少し太い。受付の人に挨拶をしてから、もう一度見た。やはり、そこだけ太かった。後ろから来た二人連れが同じ紙を見上げたので、航は一步よけた。「この次だね」と一人が言った。誰の名前を指したのかは、肩に隠れて見えなかった。

二時十七分、航は舞台脇の椅子に座った。あと三分だった。

笛を膝に置くと、銀色の縁に天井の明かりが細く映った。親指でその線を隠し、離れた。線は同じところに戻った。もう少し右を押さえてみたが、そこは最初から暗かった。

舞台では、前の人が演奏していた。入口の貼り紙には曲名も書いてあったはずだが、思い出せなかった。聞いたことのある曲なのかもしれない。次の音を頭の中で鳴らしてみると、舞台からは別の音が来た。航は自分の曲の最初を思い浮かべようとして、やめた。いま聞かえている旋律が入り込んできた。

隣の椅子に置いた楽譜の端が、座面からはみ出していた。航はそれを指一本ぶん奥へ押しした。すると反対側が金属の背もたれに当たり、紙が小さく盛り上がった。押し戻せばよかったが、両手はもう笛を持っていた。盛り上がった紙の下に、薄い影ができていた。

申し込んだ日の夜、曲名を書いて送るだけの短いメールに、航はずいぶん時間をかけた。先生からの返事は「待っています」の一行だった。いつ届いたかは覚えていない。翌朝、通学の電車で読んだ。窓に映った自分の口元が少し上がっていたので、顔をそむけた。

紙の影が動いた。

顔を上げると、係の女性が隣の椅子を引いていた。航は慌てて楽譜を取り上げた。女性は椅子の脚を両手で持ち、床につけないようにして向こうへ運んだ。金属の背もたれが幕の陰へ消えたあとも、航の左手は楽譜を差し出した形のままだった。笛を膝に戻し、紙を両手で揃えた。

壁の時計の長い針が、一目盛り進んでいた。

楽譜の二枚目だけ、右上の角が折れていた。昨夜、ケースへ急いで入れたときに折ったのだ。爪でなぞると平らになったが、離すと少し起きた。航は今度は指の腹で押した。向こうで椅子を置く音がして、指に力が入った。白い角に、爪の跡とは別の、丸い跡がついた。

「譜面台は、出てから合わせて大丈夫です」

戻ってきた女性が小声で言った。航はうなずいた。何か返事をしたほうがよかったと思ったときには、女性はもう舞台のほうを見ていた。航もそちらを見た。幕の切れ目から、演奏している人の靴だけが見える。右のかかとが少し浮いて、また床へついた。音がまだ続いていることに、そこで気づいた。

航は右足を椅子の下へ引いた。靴底が床をこすった。思ったより大きな音だった。顔を上げたが、女性はこちらを見なかった。

二時十九分だった。

笛を持ち上げ、また膝へ戻そうとした。けれど楽譜があるので、置く場所がなかった。紙を左の端へ寄せれば置ける。そう思って少しずらすと、今度は紙が滑りかけた。左手で押さえ、右手で笛を持った。さっきより窮屈な格好になった。

舞台の音が止んだ。航は笛を握り直した。

拍手は来なかった。

しばらくして、低い音が一つ聞こえた。曲はまだ終わっていないかった。航は背もたれに肩を戻し、楽譜から左手を離れた。紙は滑らなかった。さっき押さえた角だけが、また起きていた。

客席で誰かがせきをした。続いて、小さくしゃみが聞こえた。航は口を閉じたまま、鼻から息を出した。自分の靴の先を見た。片方だけ、照明が白く当たっている。足を揃えると、両方が同じ明るさになった。

最後の音が細く残った。今度は、それが消えてから拍手がした。女性が幕を少し開けた。演奏を終えた人が、楽器を持って出てきた。靴だけでなく顔も見えた。思っていたより若い人だった。航は立ちかけたが、その人が通り過ぎるのを待って座り直した。

「次、航さんです」

時計は二時二十分を指していた。

立つと、膝にあった楽譜の軽さが左手へ移った。笛は右手にある。これでよかったのだと航は思った。歩き出す前に紙の角を押さえようとして、やめた。幕の隙間を抜けると、客席が見えた。誰かがこちらへ向き直った。譜面台は、思っていたより低かった。

会が終わると、航はほかの出演者と椅子を並べ直した。受付の人がプログラムを剥がしてくれたので、四つに折ってケースへ入れた。帰りの電車では、隣の人が降りるまで眠っていた。

その後の一週間、学校へ行き、二度、雨に降られた。笛は一度だけ吹いた。日曜日、ケースの留め金に紙が挟まっているのを見つけた。折ったプログラムだった。開くと、名前の右側がやはり少し太かった。航は折り目に沿って紙を戻し、今度は楽譜の間に挟んだ。

設問

問一

出来事の順序について、本文に合うものを選びなさい。

- ア 三週間練習し、出演を申し込み、一週間練習して会場で出番を待った。
- イ 出演を申し込み、三週間練習してから会場で待ち、翌朝に返事を読んだ。
- ウ 三週間練習し、会場で返事を読んで出演を決め、一週間後に舞台へ出た。
- エ 一週間練習し、会場で出演を申し込んでから、三週間後に出番を待った。

解答

「 ー 」

問二

「紙の影が動いた。」という一文は、文章の展開の中でどのように働いていますか。最も適切なものを選びなさい。

- ア 航が通学の電車で見ていた窓の像を、舞台脇の紙の影に重ねている。
- イ 椅子を運ぶ女性の姿を手がかりに、航が申し込んだ夜を語り始めている。
- ウ 紙の影が動いた原因を示してから、申し込みの返事の内容を説明している。
- エ 申し込みのころを語ったあと、紙の影を手がかりに舞台脇へ戻している。

解答

「 ー 」

問三

「舞台の音が止んだ。航は笛を握り直した。」のあとに「拍手は来なかった。」を独立した段落として置いた働きを、最も適切に説明したものを選りなさい。

- ア 拍手がない理由を客席の不満として先に示し、その評価を航に伝えている。
- イ 終わったように受け取れる瞬間に注意を留め、次に演奏の続きを聞かせている。
- ウ 演奏が終わった事実をまず確定し、航が拍手を聞き逃した事情を説明している。
- エ 曲の途中の休みだと先に説明し、航がそれを落ち着いて待っていると示している。

解答 ー ー

解答・解説

本文の道筋 練習期間から出番前の三分間へ進み、その途中で申し込みのところに戻ります。舞台へ出たあと、演奏は語られず、会のあととその後の日々へ進みます。

問一

正答 ア

根拠と判断 冒頭では、三週間の練習、金曜日の連絡、その後の一週間という順に語っています。舞台脇の描写の途中に出てくる「申し込んだ日の夜」は、それ以前の出来事です。本文で読む順と、出来事が起きた順を区別すると、アになります。

他の選択肢 イは申し込みを三週間の練習より前に置き、返事を読む時期も演奏会の翌朝にしています。ウは会場で返事を読んだとされていますが、読んだのは通学の電車です。エは申し込みの場所と、練習・出演の順序が合いません。

問二

正答 エ

根拠と判断 申し込みの夜と翌朝を語る直前には、舞台脇で盛り上がった楽譜の下に影ができています。「紙の影が動いた。」は、その影を再び取り上げ、続く椅子の移動へつなぎます。過去の場面から出番前の場面へ戻す働きなので、エです。

他の選択肢 アは窓の像と影を重ねたとしますが、ここでは舞台脇で実際に影が動いています。イは過去の場面へ入る位置を取り違えています。ウは、あとから語られる椅子の移動を先に示したとし、返事の内容もこの一文のあとに置いています。

問三

正答 イ

根拠と判断 音が止み、航が笛を握り直すところでは、演奏が終わったように受け取れます。しかし「拍手は来なかった。」を挟んだあと、低い音が聞こえ、まだ終わっていなかったと分かります。この順に情報を渡し、いったん間に注意を留める働きを捉えたイが適切です。

他の選択肢 アの客席の不満は書かれていません。ウは、演奏の終了と拍手の聞き逃しを事実にしています。エは曲の途中だと先に説明したとしますが、それが分かるのは次の段落です。

航が握り直す動作も、初めから落ち着いて待っていたという説明とは合いません。

問四

設問の条件 短縮文との違いを、航の具体的な動作に触れて説明します。「緊張している」と心情だけを答えるのではなく、細かく描くことで何をたどれるようになるかを考えます。

根拠から答案へ 楽譜の角を押す、笛を膝へ戻そうとして紙をずらす、滑りかけた紙を押さえる、といった動作が続きます。短縮文にも待った時間と舞台へ出たことは残りますが、その途中の手元や注意の移り変わりは残りません。動作の例と、この描き方の働きを結びます。

模範解答 (七六字) 笛と楽譜を持ち直したり紙の角を押さえたりする動作を細かく描き、待ったという結果だけでなく、出番前の三分間を航の手元の変化とともにたどれるようにしている。

別解例① (七四字) 楽譜の角を押さえ、笛の置き場所に迷う動作を順に描くことで、三分間待ったとまとめるより、待つ間に航の注意が小さなものへ移る様子を追えるようにしている。

別解例② (七六字) 笛を膝へ戻そうとして楽譜をずらすなど、待つ間の細かな動きを追い、舞台へ出たという結果に急がず、航が過ごしている出番前の時間に読者の注意を引き留めている。

答案で注意したい点 動作を全部挙げる必要はありません。また「読者全員が緊張する」「実際の三分間と同じ長さで読める」とは断定できません。短い時間の細部を追わせる、注意の移り変わりを感じさせる、などの説明を本文に即して認めます。

☆**自己採点の観点** 具体的な動作を挙げていますか。その動作を細かく描く働きを、短縮文との違いが分かるように説明していますか。

問五

設問の条件 詳しい三分間、語られない演奏、短い後日談という配分を、物語全体の中心と結びます。問四の動作の説明だけでは足りません。演奏の成否を中心に語る場合との違いも必要です。

根拠から答案へ 三分間には手元や音の細部が多く置かれますが、舞台へ出た直後から話は「会が終わると」へ進みます。その後の一週間も短くまとめられます。結果の報告を中心にせず、出番前に経験した時間自体を取り出す構成だとまとめられます。

模範解答 (一一六字) 出番前の小さな動作や音を詳しく描き、演奏を省いて後の日常へ進むことで、成功や失敗という結果より、航が舞台に出るまでをどう過ごしたかに目を向けさせる。会のあとも生活は続くが、その中の短い三分間が、手触りのある一場面として浮かび上がる。

別解例① (一一五字) 演奏の出来を語らず、待つ間の手元や周囲の音を細かく追ったあとで日常を短く語るため、練習の成果を結果で確かめる筋より、舞台へ出る前に航が経験した時間を中心になる。前後の長い期間との対照によって、三分間の出来事が一つずつ際立っている。

別解例② (一一五字) 演奏の成否を中心にすれば、待つ場面は結果への前置きになりやすいが、本文はそこを詳しく描き、演奏を省いて後の日々を短く語る。これにより、舞台へ出るまでの航の動作や知覚そのものへ注意が向き、日常の中の短い時間がより具体的に捉えられる。

答案で注意したい点 「失敗を隠した」「上達より日常が大切だと教えている」など、書かれない結果や価値の優劣を補わないようにします。プログラムに触れ、出番前の経験と日常の連続を読む答案も、時間の配分と結果中心の語りとの違いを説明できていれば認めます。

☆**自己採点の観点** 詳述・省略・短い後日談を関係づけていますか。演奏の結果を中心にする語りと区別し、何に注意が向くかを説明していますか。

第四章 反論はどこに届くか

この章で身につける力 認めている点と異議を唱える点を区別し、応答が届く範囲を読みます。

月に一度集まる読書会で、次に読む本の決め方について、次の四つの文章が順に交わされました。参加者は普段、会の連絡をメールで受け取っています。会場には本を一週間置いておけますが、持ち出しはできません。

甲 最初の提案

甲① 次に皆で読む本は、持ち寄った候補から一人一票で決めませんか。それぞれ三分で本を紹介し、その場で投票します。これまでは運営係が本を選んでいましたが、参加者全員が票を持てば、それぞれの関心を選書に取り入れられます。紹介の時間も同じにして、一冊だけ長く説明されることがないようにします。

甲② 紹介では、あらずじだけでなく、自分がどこに引かれたかを話してほしいです。まだ読んだことのない本でも、紹介した人の言葉が入口になると思います。その日に本が決まれば、帰りに買ったり借りたりする予定も立てられます。

乙 提案への異論

乙① 参加者が一人一票で選ぶことには賛成です。本を持ち寄り、引かれたところを聞く時間も残したいです。ただ、紹介の直後に投票することには疑問があります。筋を短くまとめやすい本や、すぐに面白さを説明できる本に票が集まりやすくないでしょうか。

乙② 一人一票でも、判断する材料が紹介だけなら、読んでみて初めて気づく面白さは票に表れにくいと思います。会場に一週間、候補の本を置き、試し読みをしてから投票する方法を提案します。

乙③ ただし、普段の開催日以外には会場へ来られない人もいます。その人たちも、紹介以外の材料から本を確かめられる方法を考えたいです。試し読みの期間だけ延ばしても、全員が同じように使えるとは限りません。

丙 最初の応答

丙① 紹介が得意な人も苦手な人も、持つ票は一票です。紹介時間も同じなので、一部の人が多くの票や時間を与えられるわけではありません。一人一票という方法なら、運営係だけに決定権が偏る心配もなくなります。だから、その場で投票してよいと思います。

丁 その後に出された修正案

丁① 紹介だけでは分からない面白さがあるという指摘を受けて、その場で投票する案は改めます。紹介のあと一週間、会場に候補の本を置き、実際にページを開けるようにします。投票は一週間後までメールで受け付けます。票は一人一票のままです。

丁② 会場で読める時間帯は、全員へメールで知らせます。会場へ再び来られない人にも同じ案内を送り、その人たちの票もメールで受け取ります。これなら、本を見る機会と投票する機会を、全員に用意できたと考えています。

意見を一つの札にしない

① 意見を「賛成」「反対」のどちらか一枚の札にすると、整理は早い。しかし、提案には、実現したいこと、そのために選ぶ方法、その方法がよいと考える理由が含まれている。ある方法を退ける人が、目的まで退けているとは限らない。逆に、同じ目的を口にする人どうしでも、採ろうとしている方法は異なり得る。

② 反論の対象も一つではない。「その日に投票しないほうがよい」は結論への反対である。「これまでも参加者に相談して選んでいたのではないか」と尋ねるなら、運営係だけで選んでいたという理由の前提を確かめている。「一人一票であっても、候補を知る材料が偏

れば関心は十分に表れない」と述べるなら、票数の等しさから選書のよさへ進むつながりを問題にしている。最後の異論には、票数が等しいと繰り返すだけでは足りない。

③ ここで気をつけたいのは、相手の言葉を自分の答えやすい形に変えないことである。「紹介だけで決めないでほしい」を「紹介は要らない」に置き換えれば、紹介には価値があると説明するだけで反論できたように見える。けれども、相手が残したかったものを否定したことにしている。その応答がもっともらしくても、元の異論に戻して確かめる必要がある。

④ また、異論を受けて案が変わったからといって、問題がすべて解けたとは限らない。反対に、問題が残ったからといって、変更の意味がなかったともいえない。応答のどの言葉が、先のどの指摘に対応しているかを一つずつ追うと、解けた部分と、まだ説明の要る部分を区別できる。結論への賛否を急いで決める前に、相手の意見のうち何を受け取り、何を残しているかを読むのである。

読書会と四つの文章は本教材のための創作です。

設問

問一

丙は、乙の異論に対して主に何を説明していますか。最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 参加者に与える票数と紹介時間が等しく、決定権も運営係だけに偏らないこと。

イ 紹介では伝わりにくい本の面白さも、同じ長さの紹介を聞けば十分に分かること。

ウ 全員が会場で試し読みできるよう、開催日以外にも本を見る時間を設けること。

エ 候補の本を選ぶ際には、紹介した人の関心より運営係の関心を優先すること。

解答 〔 〕

問二

次は、乙に対する応答として考えられる発言です。乙が述べたことを別の主張に変えてから反論しているものを、一つ選びなさい。

ア 乙さんは投票を遅らせたんですね。ただ、その日のうちに本を決めれば、帰りに本を探せます。

イ 乙さんは紹介の時間をなくしたいんですね。ただ、ほかの人が引かれたところを聞くのも大切です。

ウ 乙さんは試し読みを挟みたいんですね。ただ、会場に来られない人への方法も決める必要があります。

エ 乙さんは紹介だけで決めたくないんですね。ただ、試し読みの期間中に本を見る時間が取れない人もいます。

解答 〔 〕

解答・解説

本文の道筋 甲の提案に乙が部分的な異論を述べ、丙が応答します。丁では案が変更されますが、その変更がこのどの指摘に対応するかは、別に確かめる必要があります。

問一

正答 ア

根拠と判断 丙は「持つ票は一票」「紹介時間も同じ」「運営係だけに決定権が偏る心配もなくなる」と説明しています。直接述べた内容に合うのはアです。乙が問題にした、候補を判断する材料の違いを解決したとまでは説明していません。

他の選択肢 イの「十分に分かる」は丙にはありません。同じ時間を与えることと、本の面白さが同じように伝わることは別です。ウは丁の修正に近い内容を丙へ移しています。エは丙が避けようとした運営係への決定権の偏りを、逆に勧める説明にしています。

問二

正答 イ

根拠と判断 乙①は、紹介の時間を「残したい」と明言しています。イは、紹介直後に決めることへの異論を、紹介そのものをなくす主張に変えています。紹介の価値を説く部分が妥当でも、乙の異論への反論にはなっていません。

他の選択肢 アは投票時期の変更、ウは試し読みの追加、エは紹介だけで判断しないことを、乙の発言に沿って受け取っています。その後の発言が最終的に十分な応答となるかは別問題です。この問いでは、相手の主張を別のものへ変えたかを判断します。

問三

設問の条件 認めている方法と変更したい方法を示し、なぜ一人一票でも変更が必要だと乙が考えるのかを説明します。

根拠から答案へ 乙①は一人一票と紹介を認め、直後の投票に疑問を述べます。乙②は、票数を等しくするだけでは、紹介で伝えやすい面白さと、読んで気づく面白さの扱いの差が残ると説明しています。そのために試し読みを加えるという関係をまとめます。

模範解答〔一〇〇字〕 一人一票で選ぶことと本を紹介する時間は認めているが、紹介だけで判断すると短く魅力を伝えやすい本に票が偏り得るため、票数が等しくても関心を十分に表せるとは限らないと考え、試し読みを挟む変更を求めている。

別解例①〔九八字〕 乙は、参加者による投票や紹介自体には賛成している。だが、一人一票でも判断材料が短い紹介だけなら、読んで気づく面白さが票に表れにくいと考え、紹介直後に決めず、実際に本を読む期間を置くよう求めている。

別解例②〔九九字〕 本の紹介と一人一票の投票を残しつつ、紹介で魅力を伝えやすい本が有利になる点を問題にしている。票の配分が等しいだけでは判断材料の偏りは解けないので、紹介のあとに試し読みの期間を加えるよう提案している。

答案で注意したい点 「投票に反対している」「紹介には意味がないと考えている」としないようにします。また、紹介しやすい本に必ず票が集まったという事実は示されていません。乙が懸念する偏りとして書きます。会場へ来られない人への配慮は問四で扱うので、本問で必須の追加要素にはしません。

☆**自己採点の観点** 投票と紹介を認める部分、紹介直後の決定を変えたい部分を区別していますか。票数の等しさだけでは判断材料の偏りが解けないという理由を結びつけていますか。

問四

設問の条件 丁の変更が乙のどの指摘に応えるかを示したうえで、「全員」という説明の残る問題を考えます。試し読み、案内、投票を区別して書きます。

根拠から答案へ 丁①は、その場で決める案を撤回し、一週間の試し読みとメール投票を置きます。一方、丁②が送るのは会場の利用時間の案内であり、本を確かめる材料ではありません。再来場できない人に投票の手段はあっても、紹介以外の材料を見る方法は示されていません。

模範解答〔一二七字〕 丁は紹介直後の投票を改め、会場で試し読みする期間を置き、メールで投票できるようにした。だが、会場へ来られない人に案内を送っても、本を確かめる材料は増えない。その人たちも投票はできるが、紹介以外の材料から判断できる方法を求めた乙の指摘には応えきれていない。

別解例①〔一二六字〕 試し読みの期間を設けた点は、紹介だけで決めないでほしいという異論に込めている。メール投票も再来場を不要にするが、送られるのは会場で読める時間の案内である。会場へ来られない人が紹介以外から本を確かめる方法は示されず、全員に本を見る機会があるとはいえない。

別解例②〔一二五字〕 丁の変更で、会場へ来られる人は本を読んでから選べ、来られない人もメールで票を送れる。しかし、全員に同じ案内を送ることは、全員が試し読みできることは違う。再び来られない人の判断材料をどう増やすかは未解決で、乙の異論の一部に応えた段階にとどまっている。

答案で注意したい点 「何も答えていない」では、試し読みとメール投票の変更を落とします。「全員がメールで本を読める」では案内を本の内容に置き換えています。自力で本を買う等の新条件を補わず、提示された案が用意した機会を評価します。新しい解決策の提案は求めています。

☆**自己採点の観点** 紹介直後の投票を改めた点を捉えていますか。案内を受け取ること、実際に本を見ること、票を送ることを区別し、乙の指摘のどこが残るかを説明していますか。

第五章 規則と裁量

この章で身につける力 共通の目的と判断方法の違いを捉え、事例への対応を比べます。

共通事例 工作会の申込み

地域の工作サークルが、会員向けの工作会を開く。定員は十二人で、申込みが多ければ抽選する。参加の機会を公平に用意し、準備を予定どおり進めるため、次の受付規程を会員に知らせている。

申込みは水曜日の十八時まで、メールで受け付ける。ただし、期限内の手続を妨げた事情を確認でき、抽選の方法や一人当たりの応募口数を変えずに対応できる場合は、運営委員会が期限後の受付を認められる。申出は翌日の正午までとし、抽選はその後に行く。窓口の担当者だけで例外を決めることはできない。例外で受け付けても、参加を優先するわけではない。

水曜日、受付側の通信設備が十七時半から十八時十分まで故障した。佐伯は十七時五十分に応込みを送ったが、送信エラーで戻った。復旧後の十八時二十分、同じ申込みを再送し、翌朝、例外扱いを申し出た。設備の記録と戻ったメールから経過を確認できる。抽選はまだ行われていない。

次の文章甲・乙は、この事例への対応と、今後の運用について、二人の会員が述べた意見である。事例・規程・文章は本教材のための創作である。

文章甲 条件を先に示す

甲① 同じ事情で困った人が、たまたま話した担当者によって違う扱いを受けることは避けたい。申込みの機会を公平に用意するためには、締切だけでなく、どのようなときに期限

後の申込みを受け付けるかも、会員が前もって確かめられる必要がある。締切を守る人にも、例外を申し出る人にも、自分の扱いを予測できることが大切だ。

甲② 佐伯の申込みは、現行規程に沿って委員会が受け付けると判断できる。受付側の故障が期限内の手續を妨げ、経過も確かめられる。申出は翌日正午まで、抽選前だから、ほかの申込者と一緒に抽選へ回せる。佐伯を先に当選させる必要はない。

甲③ 今後は、「受付側の通信障害が締切前の手續を妨げた場合」のように、例外を認める事情を具体的に書き足したい。確認する記録や、申出の期限も一緒に示す。該当する会員には同じ案内をし、詳しく交渉できた人だけが例外を知るという差を減らす。

甲④ 条件を示すことは、事情を聞かなくてよいという意味ではない。どの条件に当たるか確かめる作業は残る。申込みを出し忘れた場合と、出そうとしても受付側に妨げられた場合とを、遅れたという一点だけで同じにする必要はない。

甲⑤ まだ書かれていない事情が現れたら、委員会が現行規程の範囲で検討し、その結果を次の案内に生かす。担当者がその場で条件を足す運用にはしない。過去の判断を記録するだけで終わらず、何を認めるかを事前に読める形にしていくことを重視する。

甲⑥ もっとも、細かく書くほど利用しやすくなるとは限らない。長い条件を読むこと自体が負担になる場合もある。たとえば、申出の期限と必要な記録が案内の離れた場所にあれば、片方を読み落とすかもしれない。会員が自分に関係する条件を見つけられる書き方も、規程を整える仕事に含まれる。

文章乙 判断をたどれるようにする

乙① 条件を公表することには賛成だ。しかし、書き足した条件を見ても、自分の事情がそこに当たるか迷う人は残るだろう。規程に具体例があることと、その例だけで現実の事情を判断できることは同じではない。私も申込みの機会を公平に用意したい。そのために、すでに書かれた事情との表面的な一致だけで判断を終えないことを重視する。

乙② 佐伯について確かめたいのは、故障という名の出来事があったことだけではない。その故障が締切前の申込みを妨げたか、いつ申し出たか、他の人の抽選上の扱いを変えずに

受け付けられるかである。共通事例にはそれらを確認する材料があり、私は委員会が受け付けると判断してよいと考える。

乙③ ここでいう裁量とは、規程によって判断を任された委員会が、その範囲で事情を検討して決めることである。気の毒だと感じた担当者が締切を無視することではない。目的に合うと思えば、誰でも規程を変更できるわけでもない。

乙④ 委員会には、認めた場合も認めなかった場合も、何を確認、なぜそう判断したかを記録してほしい。会員には本人の私的な事情が分からない形で理由を説明し、次の担当者は過去の記録と照らせるようにする。似た事情の人への扱いが違えば、判断に係する差があったのかを点検できる。記録があるだけで公平になるのではなく、比べて確認するために残すのである。

乙⑤ 話を順序立てて説明するのが得意でない人にも、担当者から、手続のどこで困ったかを尋ねられる。聞き取りを、同情を誘う話の上手さを競う場にしないためにも、規程の条件を確認する質問を共有したい。

乙⑥ 同じ困難が何度も起きるなら、例外を認め続けるほかに、受付方法そのものを変える検討もできる。ただ、今回の故障だけでその必要性が決まるわけではない。甲のいう条件の明文化も、記録を踏まえて進められる。私はとりわけ、先に書き切れなかった事情に出会ったとき、どんな理由で応じたかをあとからたどれる運用を残しておきたい。

設問

問一

文章甲・乙が共通して目指していることとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 担当者が説明しやすい事情を優先して受け付け、申込みを整理する手間を減らすこと。

イ 締切を過ぎた申込みを広く受け付け、工作会へ参加できる人数をできるだけ増やすこと。

ウ 担当者との巡り合わせで扱いが変わるのを防ぎ、申込みの機会を公平に用意すること。

エ 例外を認めた会員から先に参加を決め、手続で困った人の不利益を小さくすること。

解答

ハ ヌ

問二

文章甲・乙が重視する方法と、その理由の組合せとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 甲は扱いを予測できるように例外条件の明文化を、乙は判断を点検できるように理由の記録を重視する。

イ 甲は事情を聞く負担をなくすため条件の明文化を、乙は説明が得意な人を選ぶため記録を重視する。

ウ 甲は担当者が例外条件を増やせるよう明文化を、乙は委員会の権限を広げられるよう記録を重視する。

エ 甲は未知の事情を検討から外すため明文化を、乙は過去と同じ結論を繰り返すため記録を重視する。

解答

ハ ヌ

問三

委員会が佐伯の期限後の受付を認めた場合、共通事例の規程からいえることを一つ選びなさい。

ア 通信障害が確認されたので、申出の時刻にかかわらず、同じ事情の人を抽選へ加えられる。

イ 委員会が事情を認めたので、佐伯については、抽選を行わずに参加を決めることになる。

ウ 佐伯もほかの申込者と同じ抽選の対象となり、受け付けられた段階では参加は確定しない。

エ 佐伯の遅れが認められたので、窓口担当者も、次からは単独で例外の可否を決められる。

解答 「 ー 」

問五

文章甲・乙は、まだ具体的に書かれていない事情への対応を、それぞれ今後の運用にどう生かそうとしていますか。共通して例外を規程の外で自由に決める立場ではないことも含め、一〇

○～一三〇字で説明しなさい。

解答欄
一〇〇〜一二〇字

[illegible]メ
モ

必要に応じて自由に使いましょう。

問六

共通事例への応答として、甲・乙から導かれる結論の共通点と、今後とくに重視する方法の違

解答欄 一三〇～一六〇字

[illegible]メ
モ

必要に応じて自由に使いましょう。

解答・解説

本文の道筋 共通事例は、期限後の受付を判断する条件と権限を示しています。甲・乙はその規程を踏まえ、今回の判断と今後の運用について、それぞれの重点を述べています。

問一

正答 ウ

根拠と判断 甲①は担当者による扱いの差を避け、申込みの機会を公平に用意することを述べています。乙①も公平な機会を目指し、乙④・⑤で理由や質問を共有して担当者任せの判断を抑えようとしています。共通するのはウです。

他の選択肢 アの説明が得意な人の優先は両者が避けたい差です。イの人数の拡大を目的とはしておらず、定員も変えていません。エは受付の例外と参加の優先を混同しています。

問二

正答 ア

根拠と判断 甲①・③・⑤は、会員があらかじめ扱いを確かめられるよう、例外条件を明示することを重視します。乙④・⑥は、判断を後から比べて検証できるよう、事情と理由を残すことを重視します。アが両方に合います。

他の選択肢 イは、甲④が必要とする事情の確認と、乙⑤が避けたい説明力の差を逆にしていきます。ウは明文化や記録を、権限を拡張する仕組みに変えています。エは甲⑤の未記載の事情の検討を落とし、乙の比較・検証を過去の結論の反復に置き換えています。

問三

正答 ウ

根拠と判断 規程は、期限後に受け付けても参加を優先しないと明示しています。したがって、受理後は他の人と同じ抽選の対象となります。受付と参加決定を区別するウが適切です。

他の選択肢 アでも申出は翌日正午までという期限が残ります。イは例外受付を無抽選の参加決定に変えています。エは一件の承認で窓口担当者へ判断権限まで移ったとする読み違いです。

問四

設問の条件 誰が認めるかと、なぜ規程の条件に合うかを、事例の事実から説明します。

根拠から答案へ 締切前の送信が受付側の故障で妨げられ、記録で確認できます。翌朝の申出は翌日正午までに収まり、抽選前なので他の人と同じ抽選へ加えられます。これらを確認して決めるのは運営委員会です。

模範解答〔七九字〕 受付側の故障が期限内の申込みを妨げたことを記録で確認でき、翌日正午までに申し出ている。抽選前で他の人と同じ扱いにできるため、規程上、委員会が受付を認められる。

別解例①〔八一字〕 委員会は、受付設備の故障で締切前の手続が妨げられたことを記録で確かめられる。申出は翌日正午までで、まだ抽選前なので、ほかの申込者と同じ抽選に加える形で認められる。

別解例②〔八一字〕 佐伯は締切前に受付側の故障で送信できず、その経過も確認できる。翌日正午までに申し出しており、抽選前で他の人の扱いを変えずに加えられるので、委員会が認める条件に合う。

答案で注意したい点 「少しの遅れだから」「かわいそうだから」では、規程の根拠を示せません。復旧後に再送したことだけでなく、期限内の手続が妨げられた点を捉えます。時刻をすべて書き写す必要はありません。

☆**自己採点の観点** 受付側の障害と期限内の手続の関係を示していますか。確認可能性、申出期限、他の人の抽選上の扱い、委員会の判断を結びつけていますか。

問五

設問の条件 具体的に列挙されていない事情への対応を、将来の運用へつなぐ方法を比べます。委員会の権限の範囲も示します。

根拠から答案へ 甲⑤は現行規程の範囲で検討した結果を次の案内に生かし、事前に読める条件へ整えます。乙③・④・⑥は規程内の判断として理由を残し、共有して比較できる運用を重視します。事前の見通しと事後の点検という重点の違いをまとめます。

模範解答 (一二〇字) 両者とも委員会が現行規程の範囲で事情を検討する。甲は判断の結果を例外条件として具体化し、次の利用者が事前に扱いを予測できる案内へ生かす。乙は確認した事情と判断理由を記録・共有し、似た事例と比較して妥当性を点検できるようにすることを重視する。

別解例① (一一八字) 甲も乙も、担当者が自由に規程を外れるのではなく、権限を持つ委員会の検討を求める。甲はそこで得た結果を条件の明文化につなげ、次から会員が前もって確かめられるようにする。乙は判断理由を記録して共有し、後の事例と照らして扱いの違いを検証する。

別解例② (一一九字) 例外は両者にとって、委員会が規程の範囲で判断するものである。甲は未記載の事情への判断を次の案内に反映し、条件を事前に読める形へ整えることを重視する。乙は理由を記録・共有し、似た事情の扱いと比較して、その判断をあとから点検できるようにする。

答案で注意したい点 甲を未知の事情を一切認めない立場にしたり、乙を規程を自由に無視する立場にしたりしません。乙も明文化に賛成しています。受付方法の見直しは選択肢の一つであり、本問の答案に必須ではありません。

☆**自己採点の観点** 双方が規程の範囲内で委員会に判断を求めることを示していますか。甲の事前に読める条件と、乙のあとから検証できる理由の違いが分かりますか。

問六

設問の条件 今回の結論、その根拠、今後の方法の違いをつなぎます。甲・乙のどちらが優れているかを決める問いではありません。

根拠から答案へ 甲②・乙②はともに佐伯の受付を認める判断を支持しています。規程にある事情の確認、申出期限、抽選上の扱いを守った受付であり、当選を保証しません。甲は例外条件の明文化による見通し、乙は理由の記録・共有による検証を重視します。

模範解答〔一四四字〕 甲・乙とも、確認できる通信障害で期限内の手續が妨げられ、申出期限と抽選上の公平も守られるため、委員会が佐伯を受け付け、他の人と同じ抽選に加えてよいと考える。今後は、甲が例外条件を明文化して会員の予測可能性を支えることを重視し、乙が事情と理由を記録・共有して判断を検証できることを重視する。

別解例①〔一四五字〕 両者は、佐伯の遅れに確認可能な原因があり、翌日正午までの申出で他の人の抽選上の扱いも変わらないので、委員会が受け付けてよいと考える。参加を優先する結論ではない。甲は例外条件を事前に公表して扱いを見通せるようにし、乙は判断の理由を残して共有し、似た事例と比べて妥当性を確かめることを重視する。

別解例②〔一四六字〕 佐伯を規程に沿って受け付け、他の人と同じ抽選へ回すという結論は共通する。受付側の障害と期限内の手續との関係を確認でき、申出期限にも間に合っているためである。そのうえで甲は、例外条件を案内に明示して事前に分かる運用を目指し、乙は個別の事情と理由を記録・共有してあとから点検できる運用を重視する。

答案で注意したい点 「甲は拒否し、乙は認める」とすると、方法の違いを今回の結論の対立へ広げています。また、乙が今回ただちに受付制度を改めると決めたわけではありません。明文化と記録が両立できる点を踏まえ、重点の違いとして書きます。

☆**自己採点の観点** 今回の受付と抽選の扱いが共通することを説明していますか。共通の判断根拠と、甲・乙が今後とくに重視する方法を区別してまとめていますか。

第六章 どうぞのあとで

この章で身につける力 台詞の前後と動作を結びつけ、言葉が会話の中で果たす働きを読みます。

登場人物 咲・仁・葉。三人は小さな写真展の会場を準備している。葉が打合せの進行を担当する。角括弧の中は、動作や舞台の様子を示すト書きである。

一 打合せの前

【長机の上に会場の見取図。仁が配布する紙を数えている。その横に空いた椅子が一脚。咲が段ボール箱を抱えて入ってくる。箱のふたの間から、丸めた布がのぞいている。】

咲「その椅子、使ってもいい？」

仁「どうぞ」

【咲は椅子を机の近くへ引き寄せ、箱を載せる。仁は紙を三つの束に分ける。咲が箱から布を引き出すと、下にあった巻き尺が椅子の脚に当たって落ちる。】

咲「机に掛ける布、これで全部。大きい箱は入口に置いてきた。額が入ってるほう」

仁「巻き尺も来たんだ。昨日はこれを探して、机をひもで測った」

咲「ひもは？」

仁「昨日の帰りには、机の長さをちゃんと覚えていたんだけど。家に着いたら、数字より結び目のほうが確かに思えてきて」

【仁がポケットから、何か所も結び目のあるひもを出す。咲は拾った巻き尺を、そのひもの横に置く。】

仁「どの結び目だったかな」

【葉が入ってくる。片手に鍵、もう片方の手に紙コップを三つ重ねて持っている。机の端へコップを置き、見取図の向きを変える。】

葉「水は廊下にあるよ。始める前に飲んでおく？」

咲「私はあとで。箱を抱えたら、のどが渴いたのを忘れた」

【仁はひもをポケットへ戻し、紙を一束ずつ机に置く。葉は椅子の箱を見て、自分は立ったまま見取図の入口を指す。】

二 入口の話

葉「では、いま何が運び込んでいるか、教えてもらえる？」

【咲と仁が同時に口を開く。仁は机の紙を持ち上げる。】

咲「あ、先に――」

仁「どうぞ」

【仁が紙を机へ戻す。咲は見取図の入口に指を置く。】

咲「じゃ、搬入の順から。大きい箱は入口の近くに置いてあります。先に奥の机を並べて、それから額を出せば、途中で箱をよけなくて済むと思う」

葉「奥の机は、まだ決まってないね」

【廊下で車輪の音がする。咲が入口を見る。ガラス越しに、隣の部屋へ台車が通り過ぎる。机の端の紙が一枚、床へ滑る。葉はそれを拾って裏返し、見取図の脇に重ねる。】

咲「窓際だと写真に光が映るから、壁側に寄せる案。位置が決まったら、私が箱を運ぶよ」

【葉が見取図の机を鉛筆で囲む。仁は自分の紙の端に「入口」と書く。咲が見取図から手を離す。】

仁「僕からも入口のことで。案内の紙はできてる。通りから来る人には写真展の入口が見えにくいから、曲がる所に矢印を一枚増やしたい」

【仁が紙の束から一枚抜き、見取図の横に置く。紙には大きな矢印と、小さな文字で「写真展」とある。葉はその矢印に沿って指を動かす。】

葉「これ、右に曲がるほう？」

仁「外から来たら左。図をこっちから見ると逆になる。貼る前に廊下で向きを合わせるよ」

【葉が見取図を半回転させる。咲は入口の方を振り返り、椅子の箱から、はみ出した布を押し込む。】

三 動き出す前に

葉「それ、お願いできる?」

【咲が椅子から箱を下ろし、入口へ歩き出す。仁は矢印の紙を取り上げる。】

咲「じゃ、今運ぶね」

仁「待って。今のは、案内の紙を貼る話だね?」

【咲が止まる。葉は仁の持つ紙に目を向け、それから咲を見る。】

葉「うん、仁に矢印を増やしてもらおうと思って。咲の箱は、机の位置を決めてからでいい?」

咲「あ、入口って言ってたから。私が運ぶほうかと。じゃ、箱はまだ入口に置いておく」

【咲が机の横へ戻る。仁は紙を裏返し、机に押し当てて四隅にテープを付ける。葉が鉛筆の先を、見取図の窓側と壁側の間で動かす。】

葉「先に机の場所を決めよう。仁は、そのあと紙を貼りに行ってくれる?」

仁「うん。外から歩いてきて、一度確かめてから貼る」

葉「裏口からじゃなくて、通りからね。昨日、私はいつもの癖で裏から入って、看板を一枚も見なかった」

咲「私は机を並べてから、額の箱。布は今ここに出しておくね」

【咲が床の箱から布を取り出し、机の端へ移す。空いた箱を机の下に滑らせる。葉は見取図を押さえたまま、空いた椅子へ腰を下ろす。椅子の座面から短い音がする。三人の顔がそちらへ向く。】

葉「まだ何かあった?」

【葉が立つ。座面に、箱からこぼれたテープの芯が一つ。仁がそれを拾い、指に通す。咲は巻き尺の端を机の角に掛ける。葉が反対側の角へ回り、窓から差す光の中に、白い目盛りが伸びていく。】

この戯曲は本教材のための創作です。

設問

問一

第三場冒頭の栞の「それ、お願いできる？」は、誰に何を依頼した言葉として、あとのやり取りで確認されますか。最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 咲に、入口に置かれた額の箱を、打合せの途中ですぐに運び込むよう頼んでいる。

イ 仁に、案内の紙を貼る前に、窓際へ奥の机を移して並べるよう頼んでいる。

ウ 仁に、来場者が入口へ進めるよう、曲がる所の矢印を一枚増やすよう頼んでいる。

エ 咲に、椅子の箱に残っている布を、写真を並べる机に掛けるよう頼んでいる。

解答 〔 〕

問二

第二場の仁の「どうぞ」が、先に話す順番を咲に譲る言葉として働いたことを最もよく示す組合せを、一つ選びなさい。

ア 咲が額の箱の位置を説明したあと、栞が見取図にある机を鉛筆で囲んだこと。

イ 仁が紙に入口と書いたあと、案内に使う矢印の向きを栞に説明したこと。

ウ 咲が椅子を引き寄せたあと、仁が配布する紙を三つの束に分けたこと。

エ 二人の発言が重なったあと、仁が紙を戻し、咲が搬入の説明を始めたこと。

解答 〔 〕

問三

仁の「待って。今は、案内の紙を貼る話だね？」は、その後のやり取りの中で、どのような働きをしていますか。最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 葉の依頼が何を指したかを問い直し、紙を貼る話と箱を運ぶ話を区別するきっかけとなる。

イ 咲が箱の位置を間違えたと指摘し、すでに運び込んだ額を入口へ戻すきっかけとなる。

ウ 葉が決めた作業順への反対を示し、机の位置より先に案内を整えるきっかけとなる。

エ 咲の搬入の説明を途中で打ち切り、紙の印刷が済んでいるかを確かめるきっかけとなる。

解答 ー ー

解答・解説

本文の道筋 椅子の使用、打合せの発言順、準備の依頼が、台詞と動作を通じて進みます。同じ言葉でも、前の発言と相手の応答によって、会話の中で果たす働きは異なります。

問一

正答 ウ

根拠と判断 栞の言葉の直前には、仁が曲がり角の矢印を増やす案を出しています。さらに栞自身が「仁に矢印を増やしてもらおうと思って」と述べ、仁が紙にテープを付けます。ウがこのつながりに合います。

他の選択肢 アは咲が最初に受け取った内容であり、あとで確認された依頼ではありません。

イは机の移動と仁の案内作業を混ぜています。咲が布を扱う動作はありますが、エのように布を掛ける作業を栞が依頼したわけではありません。

問二

正答 エ

根拠と判断 二人が同時に口を開いたところで、仁は「どうぞ」と言って紙を戻します。咲は「じゃ」と受け、搬入の説明を始めます。発言の重なりが解かれ、咲の説明が先に進むという前後関係を示すエが適切です。

他の選択肢 アは咲の説明の内容と栞の反応、イは仁があとで行う説明です。どちらも発言順の譲渡そのものを示す組合せではありません。ウは第一場の椅子の使用許可を受けた動作であり、問われた場面が違います。

問三

正答 ア

根拠と判断 仁は「今の」が指す依頼の内容を問い直します。それを受けて栞が相手と作業を言い直し、咲も自分の受け取り方を説明します。アのように、二つの作業の取り違えをほどこきつけとなっています。

他の選択肢 イのように箱の置き場所の誤りを直したのではなく、咲はまだ額の箱を運んでいません。ウでは作業順への反対に変わってしまいます。エも、咲の説明はすでに終わっており、紙の印刷が済んでいるかは仁がここで尋ねた内容ではありません。

問四

設問の条件 同じ台詞の意味を辞書の説明だけで答えず、各場面で相手にどんな行動を可能にしたかを、前後の言葉や動作と結びつけます。

根拠から答案へ 第一場は椅子の使用を尋ねる発言に続き、咲が実際に箱を載せます。第二場では同時に口を開いた二人のうち仁が紙を戻し、咲が説明を始めます。使用を認めることと、先に話す順番を譲ることを対にします。

模範解答 (九四字)

初めは椅子を使いたいという咲の求めを受けて使用を認め、咲は箱を載せている。二度目は同時に話し始めた場面で仁が紙を戻して発言を控え、咲が搬入の説明を始められるよう、先に話す順番を譲っている。

別解例① (九六字)

一度目は椅子を使ってよいかという問いへの承諾で、咲は椅子を引き寄せて箱を置く。二度目は二人の発言が重なったときに仁が紙を机へ戻し、咲が先に説明を始めるので、発言する順番を渡す言葉になっている。

別解例② (九三字)

最初は咲の椅子を使う許可の求めに応じ、箱を載せるための使用を認めている。次は同時に口を開いた咲に先を譲る言葉であり、仁が紙を戻す一方で、咲はそれを受けて搬入の順について説明を始めている。

答案で注意したい点

「どちらも親切にしている」だけでは、働きの違いを説明できません。仁が本心では話したくなかったなどと補う必要ありません。「承諾」「発言順の譲渡」という用語自体は必須ではなく、行動の関係が分かる説明を認めます。

☆自己採点の観点

第一場では椅子の使用、第二場では発言の順番を扱っていると区別していますか。それぞれを前後の発言や動作で支えていますか。

問五

設問の条件 咲の受け取り違いから、問い直し、依頼の言い直し、作業順の確認へ進むつながりを説明します。誰が何をしたかを並べるだけでなく、応答によって何が整理されたかを示します。

根拠から答案へ 咲はすぐ搬入する依頼と受け取ります。仁の確認に栞が答えることで、案内は仁、箱は机の位置が決まってからという区別が生まれます。咲の応答に続き、栞が机の場所を先に決めると述べ、仁と咲がその後の自分の作業を確認します。

模範解答 (一二二字) 咲は箱を今運ぶ依頼だと受け取って歩き出すが、仁が案内の紙の話かと問い直し、栞が仁への依頼で、箱は机の位置が決まってからだと明らかにする。咲も箱を置いておくに応じ、まず机の場所を決め、仁はそのあと紙を貼り、咲は机を並べてから箱を運ぶと確認される。

別解例① (一二四字) 栞の言葉を咲は自分への搬入の依頼と捉え、すぐ動き出す。仁が紙を貼る話かと確かめると、栞は仁への依頼だと説明し、箱は机の位置を決めてからとする。咲も運ぶのを待つと応じ、机の場所を先に決めたらうで、仁は紙を貼り、咲は机を並べて箱を運ぶ流れが確認される。

別解例② (一二一字) 咲が今すぐ箱を運ぶよう頼まれたと思って動くため、仁が案内の紙の話ではないかと問い、栞は仁に矢印を増やしてもらう依頼だと説明する。咲は箱をまだ置いておくと言え、机の位置を決めたあと仁が紙を貼ること、咲が机を並べてから箱を運ぶことが確かめられる。

答案で注意したい点 仁が問い直ただけで全員に伝わったとせず、栞の言い直しと二人の応答を含めます。紙を貼り終えた、箱を運び終えたとは書きません。また、仁の案内作業と咲の搬入の前後関係までは決められていません。仁が先に貼り終えないと咲は動けない、とは読めません。

☆**自己採点の観点** 咲が何を頼まれたと受け取ったかを示していますか。仁の問いと栞の説明による修正、それを受けた作業順の確認を結びつけていますか。

第七章 条件のかたち

この章で身につける力 主張の向きを読み分け、それを崩す反例を選びます。

① 「それがあれば足りる」と「それがなければならない」。どちらも条件を述べる言葉だが、確かめようとしていることは違う。この違いを読むには、条件を指す言葉だけでなく、その前後に何が置かれているかを見る必要がある。「必要」「十分」という名前を覚えても、二つの事柄の向きを取り違えれば、主張とは別のことを調べてしまう。

② ここでは、対象の範囲を決め、その中で二つの事柄が成り立つかどうかを考える。ある事柄をA、別の事柄をBと呼ぼう。Aが成り立つ対象では必ずBも成り立つとき、AはBの十分条件である。同じ関係をBの側から述べると、BはAの必要条件となる。Aを満たせばBを満たすには足り、Bを満たさないままAを満たすことはできないからだ。

③ たとえば、整数全体を範囲とし、Aを「四の倍数である」、Bを「偶数である」とする。四の倍数とは四に整数を掛けた数、偶数とは二に整数を掛けた数である。四に整数を掛けた数は、二にその整数の二倍を掛けた数でもある。だから、四の倍数なら必ず偶数である。この説明は、正の数だけでなく、零と負の整数にも当てはまる。

④ しかし、偶数なら必ず四の倍数だとはいえない。二は偶数だが、四の倍数ではないからだ。こうして主張を成り立たなくする具体例を、反例という。二という一例は、AがBの必要条件だという主張を崩す。一方、AがBの十分条件だという主張は崩さない。四の倍数から偶数へ進む道があることと、偶数になる道がそれしかないこととは、違うのである。

⑤ 反例のかたちは、主張の向きに対応する。AがBの十分条件だという主張には、Aを満たすのにBを満たさない例が反例となる。AがBの必要条件だという主張には、Bを満たすのにAを満たさない例が反例となる。「条件を満たしたのにうまくいかなかった」という言葉だけでは、どちらの主張を崩したのかは決まらない。何をA、何をBとしているかまで戻って読む必要がある。

⑥ 反対に、AとBと一緒に満たす例が一つ見つかったとしても、それだけで範囲全体の関係が決まるわけではない。十二が四の倍数でも偶数でもあるという事実だけから、二つの条件が同じだとはいえない。また、AがBの必要条件が十分条件かを、いつも二者択一で選べるわけではない。双方の向きが成り立つ場合も、どちらの向きも成り立たない場合もある。

⑦ 日常の言葉に移ると、まず範囲と判定の基準を明らかにする必要がある。「この教材を使えば伸びる」の「伸びる」は、何をどの期間で比べるのか。「使う」は、一ページ開くことなのか、一冊分を終えることなのか。これらを決めずに例を集めても、同じ主張を確かめているとは限らない。さらに、使用者二人の伸び方に差があっても、二人とも伸びたのであれば、「使えば伸びる」への反例にはならない。

⑧ なお、ここで扱うのは、定めた範囲で何が何を伴うかという関係である。四の倍数であるために、あとから偶数になるわけではない。同じように、教材を使った全員の得点が上がったという記録があっても、それだけで教材が上昇の原因だと証明したことにはならない。日常の「必要だ」には、勧めや強い希望が込められることもある。言葉をすべて同じ形式に押し込めず、ここで確かめている関係を区別しておきたい。

⑨ このような範囲全体に及ぶ主張を否定するには、それと食い違う例を一つ示せばよい。しかし、その食い違いは、印象の違いや結果の大小とは限らない。主張が通れるとしたところで通れないのか、それしかないとしたところに別の通り道があるのか。反例を探す作業は、反対の材料を増やす前に、相手の言葉がどの道を示したのかを読み直す作業なのである。

本文・設問の事例は本教材のための創作です。

設問

問一

整数全体について、本文の説明に合うものを一つ選びなさい。

- ア 四の倍数であることは偶数であるための必要条件であり、十分条件ではない。
- イ 四の倍数であることは偶数であるための十分条件であり、必要条件ではない。
- ウ 四の倍数であることは偶数であるための必要条件でも十分条件でもある。
- エ 四の倍数であることは偶数であるための必要条件でも十分条件でもない。

解答 〔 〕

問二

ある箱には、赤い印や青い印の付いた札が複数枚入っています。一枚を取り出すと、赤い印と青い印の両方が付いていました。ほかの札については分かっています。この箱の札全体を範囲とするとき、この一枚だけからいえることとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

- ア 赤い印があることは、青い印があるための必要条件だが、十分条件とはまだ決められない。
- イ 赤い印があることは、青い印があるための十分条件だが、必要条件とはまだ決められない。
- ウ 赤い印があることは、青い印があるための必要条件でも十分条件でもないと決まる。
- エ 赤い印があることが、青い印があるための必要条件か十分条件かは、まだ決められない。

解答 〔 〕

問四

ある会の参加者全員を範囲とし、Aを「受付を済ませている」、Bを「名札を持っている」とします。湊は受付を済ませています但名札を持たず、凜は受付を済ませませんが名札を持っています。AがBの十分条件だという主張と、AがBの必要条件だという主張は、それぞれ誰の事例によって否定されますか。二人の状態と主張の向きを対応させ、六〇〜九〇字で説明しなさい。

解答欄 六〇〜九〇字

メモ

必要に応じて自由に使いましょう。

解答・解説

本文の道筋 ①～②で条件の向きを定め、③～⑥で例と反例の違いを確かめます。⑦～⑨では、日常の発言に戻り、範囲・基準と主張の向きを読み直します。

問一

正答 イ

根拠と判断 ③では、どの四の倍数も二に整数を掛けた形で表せると説明しています。四の倍数であることは、偶数であることを満たすのに十分です。一方、④の二という例が示すように、偶数であるために四の倍数である必要はありません。したがってイです。

他の選択肢 アは必要と十分を逆にしています。ウは、二が偶数でも四の倍数ではないことに反します。エは、四の倍数なら必ず偶数であるという関係まで否定しています。必要条件と十分条件を、単に二つの反対語として選ばないようにします。

問二

正答 エ

根拠と判断 ⑥でいう、二つの条件を一緒に満たす一例に当たります。未確認の札には赤だけ、青だけ、両方、どちらも無い札があり得ます。この一枚だけでは、箱全体で必要条件・十分条件が成り立つとも、成り立たないともいえません。正答はエです。

他の選択肢 アの必要条件を確かめるには、青い印がある札に赤い印がない例がないかを調べます。イの十分条件には、赤い印がある札に青い印がないかを調べます。ウの「どちらでもない」は、まだ分からないことを、どちらも成り立たないことに置き換えています。

問三

設問の条件 二が満たす条件と満たさない条件を示し、その組合せが「必要だ」という主張にどう反するかを説明します。

根拠から答案へ ④の二は、偶数というBを満たし、四の倍数というAを満たしません。AなしでBが成り立つ例なので、AがBには欠かせないという主張の反例です。

模範解答〔四八字〕 二という数は偶数でありながら四の倍数ではなく、四の倍数でなくても偶数である場合があると示すから。

別解例①〔四九字〕 二は四の倍数という条件を満たさずに偶数であり、偶数にはその条件が欠かせないという主張に反するから。

別解例②〔四七字〕 偶数である二が四の倍数ではないため、偶数であるには四の倍数でなければならぬとはいえないから。

答案で注意したい点 「二は四で割り切れない」とだけ書くと、偶数であることとの関係が抜けます。偶数であることを示したうえで、四の倍数である必要はない、とつなぎます。「四の倍数なら偶数」への反例だとしないうにします。

☆**自己採点の観点** 二が偶数であり、四の倍数ではないことを示していますか。それを、必要条件だという主張の否定に結びつけていますか。

問四

設問の条件 十分条件と必要条件の二つの主張について、それぞれ反例となる人物と、その人の状態を対応させます。

根拠から答案へ 十分条件の主張は「受付済みなら名札あり」です。湊は受付済みでも名札がないので反例です。必要条件の主張は「名札があるなら受付済み」です。凧は名札があっても受付前なので反例です。二人を入れ替えると、別の向きの主張を否定することになります。

模範解答 (七五字) 受付済みの湊が名札を持たないので、受付を済ませれば名札を持つという十分条件の主張は否定される。未受付の凧が名札を持つので、必要条件の主張も否定される。

別解例① (七六字) 湊は受付済みでも名札がなく、受付済みが名札所持の十分条件だという主張を崩す。凧は受付を済ませずに名札を持ち、受付済みが名札所持に必要なという主張を崩す。

別解例② (七五字) 十分条件の主張には、すでに受付を済ませたのに名札を持たない湊が反例となる。必要条件の主張には、受付を済ませていないのに名札を持っている凧が反例となる。

答案で注意したい点 ここでは、名札を先に受け取った事情や受付の手順を推測する必要はありません。示された同じ時点の状態から判断します。A・Bという記号で簡潔に書いても、人物と条件の成立・不成立の対応が明確なら認めます。

☆**自己採点の観点** 湊を十分条件の反例、凧を必要条件の反例に対応させていますか。それぞれについて受付と名札の両方の状態を示していますか。

問五

設問の条件 甲の上昇幅、乙の対象時期をそれぞれ主張と比べ、同じ主張を否定するための具体的な条件を示します。

根拠から答案へ ⑦の範囲と判定基準の確認を、この発言に当てはめます。全員が上がったという主張は、同じ点数だけ上がったという主張ではありません。また対象は四月の参加者です。その中の一人が教材一冊分を終えても、初日より最終日の得点が上がっていなければ反例となります。

模範解答〔一〇八字〕 甲は上がり幅の違いを述べるだけで、二人とも得点が上がったことと矛盾しない。乙は四月の参加者という範囲から外れる。反例には、四月の参加者のうち教材一冊分を終えながら、最終日の得点が初日より上がらなかった人が必要である。

別解例①〔一〇六字〕 甲の二人は伸び方が異なっても得点は上がっており、全員が上がったという主張を崩さない。乙は五月の例なので対象外である。四月の講座で教材一冊分を終えた人に、最終日の得点が初日以下だった人がいれば、主張への反例になる。

別解例②〔一〇八字〕 主張は得点の上昇幅が同じだとは述べていないので、甲では否定できない。乙の五月の参加者も、四月に限った主張の反例にはならない。四月の参加者で教材一冊分を終えたのに、最終日の得点が初日と同じか下がった人を示す必要がある。

答案で注意したい点 得点が下がった人だけでなく、同じだった人も反例です。「教材を使っただけでは、一ページ開いた人なども含み得るので、一冊分を終えたという条件を保ちます。教材が上昇の原因かどうかは、この設問で否定を求めている主張とは別です。

☆自己採点の観点 甲・乙それぞれが反例にならない理由を説明していますか。四月の参加者、一冊の完了、初日と最終日の得点という範囲・条件・比較を保って反例を示していますか。

第八章 行の切れ目で

この章で身につける力 詩の言葉と配置を確かめ、二つの批評を読み比べます。

Aは原詩、Bは比較のために配置を変えたものです。空白の行も含め、紙面での行の切り方を見比べてください。

A ベランダ

風がやむ
シャツの袖が
となりの袖を
はなす

風が吹く
また
つかむ

ベランダには
だれもない

B 比較用の配置

風がやむ シャツの袖がとなりの袖をはなす
風が吹く またつかむ
ベランダにはだれもない

詩・批評・設問は本教材のための創作です。

批評甲 袖が手になるとき

次の甲・乙は、この詩を読んだ二人による批評です。二人がどの言葉や配置に目を留め、そこから何を読み取っているかを確かめてください。

甲① この詩を読むと、干されたシャツが手をつないでいるように見えてくる。「シャツの袖が」と示されているので、実際に人がいると思い違いをするわけではない。それでも、「となりの袖を」「はなす」と読み進める間に、袖の先に手の動きを重ねてしまう。風で布が揺れる、ごくありふれた眺めが、誰かと触れたり離れたりする場面へ近づいていく。

甲② とりわけ目を引くのは「また」だ。この語だけで一行を占め、その次に「つかむ」が現れる。「また」を読んだ時点では、何を繰り返すのかを次の行へ取りに行くことになる。直前には「はなす」があったのに、戻ってくるのは、つかむ動きである。袖は離れる前にも触れ合っていたのだろう、と先ほどの場面まで思い直す。短い一語が、先へ進むきっかけになると同時に、すでに読んだ動きを振り返らせる。「つかむ」が別の一行として置かれていることも、布の先がもう一度相手に届く、その一瞬をはっきり見せている。

甲③ 最後の「だれもない」を、私は前の動きを打ち消す言葉とは読まなかった。人がいないと分かって、袖がつかみ合っているように見えたことまで消えはしないからだ。むしろ、人のいない場所で袖だけが人らしく動くのが、少しおかしい。二つの袖のあいだにだけ、小さな親しさが生まれているように思う。「つかむ」には強い動きも感じられるが、ここでは「はなす」と交互に現れるため、離れてもまた触れるやり取りとして読んだ。袖を持ち主の代役と決めたり、その二人の関係を想像して補ったりする必要はない。

甲④ Bと比べると、Aでは袖の動作を一つずつ取り出しやすい。Bの「風が吹く またつかむ」は一行に続くので、風と袖の動きが一まとまりになり、状況を説明する調子が強まる。Aでは動作に向けられる注意が、Bでは出来事のつながりへ移るのだ。Bになると、袖の動きは風による布の動きの説明となり、人同士の触れ合いを思い描く働きは失われている。

批評乙 動く袖と空いた場所

乙① 甲がこの詩に親しさを感じたというのは分かる。「つかむ」は、ただ布が触れるというより、人の手を思わせる言葉だからだ。ただ、私が読み終えてまず目を戻したのは、最後の二行だった。「ベランダには」で場所が示され、次の「だれもない」で、その場所に人の姿がないことが告げられる。それまで細かく動いていた袖から、ベランダ全体へ目を移すと、触れ合うのは袖ばかりで、その中に腕がないということが、急に気にかかってくる。

乙② この見え方には、二行の前に置かれた空白も関わっていると思う。袖の動きがいつたんまとまり、そのあとで、人のいない場所を眺め直す形になるからだ。空白そのものに寂しさが書いてあるわけではない。「つかむ」という人らしい動きのあとに、人がいないという言葉が来る。その間に区切りがあることを、ここでは重く見たい。

乙③ 私はそこに、触れ合う動きと、触れ合う人がいない場所との隔たりを感じた。けれども、この詩から別れた恋人や亡くなった家族まで読み取ったとはいえない。そうした人の事情を語る言葉はない。袖が動いていることと人がいないことを並べて見るだけでも、触れ合いの印象がそのまま安心にはつながらない感じは残る。甲の言う親しさと、私の感じた隔たりとは、片方があればもう片方は消えるという関係でもなさそうだ。同じ「つかむ」に人の手を思い描くからこそ、私は結びでその手の持ち主を探すように読んだのだと思う。

乙④ Bを読むと、「ベランダにはだれもない」が一行にまとまっている。場所を示す語と人の不在を告げる語を続けて捉えやすく、Aのように二行に分かれているときとは、目の留まり方が違う。それでも、袖の動きのあとにこの一行が来る順序は変わらない。Bでも、人らしく動くものと人のいない場所を重ねて読むことはできる。私にとって、Aの結びの二行はその隔たりを際立たせるが、隔たりを思うきっかけが改行だけにあるとは考えない。

設問

問一

AとBを照合した説明として、適切なものを選びなさい。

ア AとBでは、同じ語が同じ順に並び、行の切れ目と空白の置き方が異なる。

イ AとBでは、同じ語が並んでいるが、袖がつかむ動きと離す動きの順が異なる。

ウ AとBでは、行の切れ目が同じで、繰り返しを表す語を置く位置が異なる。

エ AとBでは、動作を表す語が同じで、最後に述べられる場所の範囲が異なる。

解答 〔 〕

問二

Aの結びを「ベランダには」「だれもない」の二行に分けた働きとして、配置に即した説明を選びなさい。

ア 場所を示す語を後へ送り、人の不在を先に告げてから袖の動作へ戻している。

イ 場所を示す語から次の行へ進ませ、人の不在を告げる言葉を際立たせている。

ウ 場所を二つの行に割り当て、袖のいる場所と人のいる場所を対比している。

エ 場所と人の不在を同じ行に収め、前の袖の動作と一続きに捉えさせている。

解答 〔 〕

問三

批評乙の「隔たり」という読み取りを支える根拠の説明として、最も適切なものを選びなさい。

ア 袖の動きのあとに空白があり、その間に風がやんだことを示している。

イ 袖を人の手に重ねる言葉があり、その持ち主が別れたことを示している。

ウ 人らしく動く袖のあとに、区切りを置いて人のいない場所を示している。

エ 人のいない場所を初めに示し、そのあとに袖の触れ合う動きを置いている。

解答 〔 〕

解答・解説

本文の道筋 詩の配置を比べたあと、甲・乙がどの形に何を読み取るかを確かめます。形の違いを正確に押さえることと、効果を一つに決めることは同じではありません。

問一

正答 ア

根拠と判断 AとBでは、風がやみ、袖が隣の袖をはなし、風が吹くとまたつかみ、最後に人がいないと述べる順序が一致します。語を加えたり取り除いたりせず、行と空白の置き方を変えているので、アです。

誤答のずれ イは「はなす」「つかむ」の順が変わるとしますが、どちらでも同じ順です。ウはAの「また」と「つかむ」が別の行であることを見落としています。エは「ベランダにはだれもない」という場所の範囲まで変えています。配置の変更と、述べる内容の変更を区別しましょう。

問二

正答 イ

根拠と判断 Aでは「ベランダには」で一行が終わり、次の行で「だれもない」と告げます。場所からその状態へ目を進めさせ、不在を告げる言葉を一行として際立たせると説明したイが適切です。ここでは寂しさを感じるかどうかで正答を決めません。

誤答のずれ アは場所と不在を告げる順序が逆です。ウは二行を別々の場所に対応させていますが、二行とも同じベランダについて述べています。エは一行に収まるBの配置をAの説明にしており、前の動きとの区切りも捉えていません。

問三

正答 ウ

根拠と判断 乙②・③は、「つかむ」という人らしい動きと、空白のあとの人の不在を結びます。動いているのは袖だけだと眺め直すことから「隔たり」を読むので、ウです。空白の存在だけでなく、区切りの前後に何があるかが根拠です。

誤答のずれ アは空白を風がやむ出来事の表示としていますが、その位置に風がやむとは書かれていません。イは詩が述べていない持ち主の別れを補っています。エは結びにある人の不在を、冒頭へ移しています。

問四

設問の条件 Aの二語を別々の行に置く働きを、Bと比べて説明します。行が短いという事実だけでは足りません。その形が、何に注意を向けさせるかまで結びます。

根拠から答案へ Aは「また」で一行が終わり、次に「つかむ」が一行で現れます。Bは風の動きと合わせて一行です。繰り返しと動作を段階的に見せる、次の行への関心を生む、以前の接触を思い直させる、などの説明が可能です。採る見方に必要な語の関係を示しましょう。

模範解答 (八七字) 「また」を独立させて動きの繰り返しに注意を向け、次の行で「つかむ」という動作を際立たせている。Bのように一行に続ける場合より、離れた袖が再び触れ合う動きを区切って追いやす。

別解例① (八六字) 「また」だけの行では何を繰り返すのかを待つ形になり、次の「つかむ」で袖の動きが分かる。Bの一続きの表現より、繰り返すものを確かめようと、次の行へ目を進めるきっかけが目立つ。

別解例② (八七字) 「また」を一行に置き、その次に「つかむ」を示すことで、袖が離れる前にはすでに触れていたことへ注意が戻る。Bより二語のつながりを目立たせ、いまの動きから前の状態を思い直させる。

答案で注意したい点 三答案は同じ言い換えではありません。第一は動作の区切り、第二は次の行への期待、第三は前の状態への振り返りを中心にしています。全部を盛り込む必要はありません。Bにはその働きが全くないとせず、配置による目立ち方の差を説明します。

☆**自己採点の観点** 二語が別々の行にあることと、その効果につながっていますか。Bとの違いを含め、何を追う、待つ、思い直すのかが分かりますか。

問五

設問の条件 甲・乙それぞれについて、重く見る箇所と受け取る印象を対応させます。自分がどちらに賛成するかや、甲の比較の誤りを指摘することは、この問いの条件ではありません。

根拠から答案へ 甲②・③は、分かれた「また」「つかむ」から再び触れる動きを取り出し、人がいなくても親しさを読みます。乙①〜③は、動きのあとの空白と結びを通して、人らしい動きと人のいない場所との隔たりを読みます。両者とも人の手を思わせる語を読んでいます、その先の重心が違います。

模範解答「一二三」 甲は「また」「つかむ」を分けた配置に注目し、袖が離れても再び触れる動きに、人のいない場所で生まれる親しさを読む。乙は袖の動きのあとに空白を挟んで置く「ベランダには」「だれもない」を重く見て、人らしく触れ合う袖と、その手の持ち主のいない場所との隔たりを感じている。

別解例①「一二三」 甲は一行ずつの「また」「つかむ」から、離れた袖が再び相手に届く動きを捉え、人がいなくてもそこに親しさを感ずる。乙は「つかむ」のあと、空白を経て人の不在を告げる二行に注目し、人の手を思わせる動きがあるからこそ、触れ合う人のいない場所との隔たりが際立つと読んでいる。

別解例②「一二三」 甲は「また」と次の行の「つかむ」によって、袖が離れても触れ直す動作が目立つことに親しさを読む。乙は結びの前の空白と、「ベランダには」から「だれもない」へ進む配置に目を向け、動く袖に人の手を重ねながら、その手を持つ人の姿がないことに隔たりを感じる点で異なっている。

答案で注意したい点 「甲は明るい、乙は暗い」だけでは、根拠との関係が分かりません。また、甲も結びを読んでおり、乙も袖の動きを見えています。片方が他方の根拠を知らないという説明や、親しさと隔たりが両立しないという整理は避けます。

☆**自己採点の観点** 二人の注目箇所と印象をそれぞれ結んでいます。重心の違いを示しつつ、二つの印象を単なる正反対にしていますか。

問六

設問の条件 対象は甲④のA・B比較です。成立する比較を認めたくえて、具体的な語と配置に戻り、直す必要のある説明と、その捉え直しを述べます。甲の親しさという印象自体を否定する問いではありません。

根拠から答案へ Aの別々の行とBの一行を比べれば、動作を取り出すか、風とのつながりを追うかという説明は支えられます。一方、Bにも「はなす」「つかむ」があります。改行を変えても、人の動きを重ねる語は消えません。働きがあるかないかの差ではなく、注意を向ける場所やまとまりの差として言い直せます。

模範解答〔一八七字〕 Aは「また」「つかむ」を別々の行に置き、Bは「風が吹く またつかむ」を一行にするので、Aでは動作を取り出しやすく、Bでは風とのつながりを追いややすいという比較は成立する。ただし、Bにも「はなす」「つかむ」が残り、人の手を思い描く手ばかりは失われていない。違いは触れ合いを読む働きの有無ではなく、区切り方で、動作を一つずつ見るか、風との関係が続けて見るかという注意の向き方にある。

別解例①〔一八五字〕 甲がいうように、Aの独立した「また」と「つかむ」は袖の動きを際立たせ、Bの一行の「風が吹く またつかむ」は風と動作をまとめて捉えさせる。しかしBでも、シャツの袖が隣の袖を「はなす」「つかむ」と語られ、人同士の動きを重ねることはできる。したがって、その働きがBで失われたとする部分は修正したい。行の区切りは動作への注意を変えるが、人の手を思わせる語まで取り除くわけではない。

別解例②〔一八六字〕 Aでは「また」だけの行から次の「つかむ」へ進み、袖が触れ直す動きに目を留められる。Bでは二語が「風が吹く」と同じ行にあり、出来事をつなぐりを追いやす点は甲の説明が認められる。一方、Bにも「シャツの袖が」「はなす」「つかむ」と人の動きを重ねる語があり、触れ合いを思う働きが消えたとはいえない。AとBの差は、同じ語を異なる区切りで提示したときの目立ち方の違いとして捉えたい。

答案で注意したい点 「言いすぎだ」で止めず、Bに何が残っているかを示します。逆に、語が同じだから効果も同じだとすると、配置の違いを捨ててしまいます。甲④の最後の説明だけを直し、成立する比較は残すことができます。

☆**自己採点の観点** A・Bの具体的な配置から、成立する比較を説明しましたか。Bに残る語を根拠に修正点を示し、違いをどう捉え直すかまで述べていますか。

あとがき

言葉の意味を確かめることと、その言葉の働きを読むことは、つながっています。同じ物を別の基準で一覧にしたとき、同じ数字に違う説明を添えたとき、同じ一語を別の行へ置いたとき、確かめたいことも少しずつ変わりました。

読み直すときは、最初に引っかけた一文へ戻ってみてください。答えが変わることも、同じ答えを前より具体的に説明できることもあります。一緒に取り組む相手がいる場合には、どの言葉を根拠にしたのかを話し合ってみるのも面白いでしょう。

奥付

書名 現代文問題集 第七冊 言葉の働きと文章の仕組みを読む

役割 標準↘発展 論証・物語・会話・詩

発行 和会塾

版 改訂統合版

発行日 二〇二六年九月二三日

本文・詩・批評・事例・設問は本教材のために制作したものです。学習用の架空資料は、それぞれの箇所に明記しています。